

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

かい ろ
開 炉

平成28年11月第1週放送

十一月一日になりますと、禅の修行道場では冬に向けた準備をいたします。衣ころもや着物は冬物に着替えます。正に衣ころもが替えです。また、坐禅堂では、前後の出入り口に下がっている「簾れん」を、夏物から冬物へと取り替えます。

そして「開炉かいろう」は“炉ろを開く”と書き、暖を取るために火鉢ひばちを運び入れて炭すみを入れるということです。

どうげん しょうぼうげんそう さぜん ぎ まき
道元禅師は『正法眼蔵』「坐禅儀」の巻で、「坐禅をする場所は、冬には暖かく夏は涼しくすべきである」とお示しになりました。

「開炉」の作法が禅の寺で行われるようになったのは、中国仏教の修行道場からです。昔の中国での修行道場の決まりを記した『禅苑清規』では「それ程寒く無いのに炭が多すぎると施ほどこしを無駄にする」、「寒いのに炭が少ないと皆が凍こえてしまう」、「炉ろを囲む時は無駄話をしないように相向あひむかいを避け、殊更ことさらに火をいじらぬ様にせよ」などとあり、遠い昔の中国で、冬の寒い中 修行僧同士が仲良く火鉢を囲んでいる様子が偲ばれて、むしろ微笑ましくもあります。

かいろう ろびら げんちよ
「開炉」つまり炉開きの日は、すでに平安時代に宮中行事となった“玄猪げんちよの日”として日本に伝わっていました。旧暦十月の「亥いの日」に、七種の粉を入れてウリ坊の模様を付けた餅、その名も「猪の子餅いのしし」を食べると、猪いのししの多産に因んで子孫繁栄と無病息災の御利益があるとされました。さらに「亥の日」は“水の日”であることから、火災を逃れることができるという信仰により、この日を待って火鉢ひばちや炬燵こたつを出すという習慣がありました。

さどう
後に茶道では、茶室の畳替えをして炉を開き、この日の茶会で初めてその年に取れた新茶の茶壺ふうきの封切りをする、口切りの茶事くちき ちゃじ、いわゆる「炉開きの茶会ろびら ちゃかい」をする様になります。この時にぜんざいを食べる習慣があるのは、小豆あずきが「猪の子餅」の材料の一つだからという説があるそうです。

ちゃじん
「茶人の正月」ともいわれるこの日は、今年くは奇しくもお寺の「開炉」と同じ十一月一日。千利休は、柚子の実が色付く頃に炉を開いたと言われていますが、ちょうど今年はその時期に当たります。

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

「^{かいろ}開炉」の日を、道元禅師が上^{じょうどう}堂、すなわち説法をする日に定めていたのには、一つの理由として、季節の大きな節目^{ふしめ}にあたって修行に向かう気持ちを引き締めたいという思いがあったのかも知れません。

秋が一段と深まりゆくこの季節に、寒さに背中を丸めることなく、道元禅師の伝えた坐禅^{なら}に倣い、心の居住まい^{いす}を正して背筋を伸ばし、心静かに坐りたいものです。

— 終 —